

「瀬戸内海言語資料室」の開設に当って

一、『瀬戸内海言語図巻』資料の受贈

この度、本学に、瀬戸内海言語資料室が開設される運びとなった。本資料室は、瀬戸内海域の方言資料を広く収納するとともに、この言語についての研究を推進し、併せて、真摯な研究者に公開することをわかつている。この資料室の言語資料の核をなすものは、『瀬戸内海言語図巻』資料一式である。

『瀬戸内海言語図巻』資料は、本学会員であり、かつ前広島大学文学部教授藤原与一博士（現広島方言研究所）が、その在任中から、調査収集された方言資料とその研究成果とであつて、この度、あげて資料一式を広島大学に寄贈して下さることになったものである。

直接の窓口としての文学部国語学国文学研究室は、この御意志を有難く拝受し、末長く保管につとめるとともに、内外の研究者に利用の便宜をはかつて、斯学の発展寄与に資したいと願つて来た。ここに、その資料室と収納設備が出来上ることになったのである。

二、資料の内容

『瀬戸内海言語図巻』資料は、調査カードと言語地図を主体とする十二品目から成る。その主なものは左記のとおりである。

「調査カード」カード総計 約四万四〇〇〇枚

1 調査の原カード

地点別の調査カード 約二万二〇〇〇枚

一地点二四〇枚のカードが、九二五地点にわたつてゐる。

2 原カードの複製

項目（二四〇項）別にまとめたカード約二万二〇〇〇枚
約九百枚組みのカード二四〇箇。

「言語地図」地図総計 二二五〇枚

3 第一次製作地図 二五〇図

新聞紙大にして七五〇枚。一図は新聞紙大を横に三枚つないだもの。

4 第二次製作地図 一五〇〇枚（一枚は新聞紙大）

「地図製作用具など」

5 白地図（今後、演習等に使用することができ）約三二〇〇枚

（新聞紙大）

6 符号用ゴム印（使用済のもの、今後使用可能のものも含む）約八〇〇種

7 瀬戸内海言語調査地図原簿

8 諸記録ノート

三、本資料の価値

『瀬戸内海言語図巻』資料は、右に述べたように、瀬戸内海域の方言の調査カード約四十五万枚と、それに基づく言語地図 約二千五百枚、未製図の白地図三千二百枚、及び地図製作用具を主とするものであつて、その規模、内容のいずれにおいても、画期的な成果と見られ、言語研究上、極めて貴重なものである。

のみならず、広島大学が将来にわたって担当して行くべき瀬戸内海文化研究のうえからも、その基礎的資料として重要なものである。本資料の、言語資料としての価値は、凡そ次の項目としてまとめることができる。

1 調査カードは、瀬戸内海島嶼（人の住む、一二六島の七〇一地点で、各島についてすべての集落を調査及び全沿岸地帯の要地一四一地点と、第二次沿岸調査八三地点の総計九二五地点を対象として、音韻・アクセント・語法・表現法・語詞語彙など、言語の体系的考察に基づき、厳選された二四〇の調査項目について、それぞれ、老年層（六十歳代女性）と少年層（中学二年女性）の二層を調査し、方言の動態を対照的に考究することが配慮されている。

十余年の準備期間と五ヶ年の実動調査期間とを以て、一定方針の下に養成された二十余人の均質的な調査員（広島大学大学院文学研究科の卒業生が中心）の助力を得て調査完了したものである。その量の多さ、質の厳密さにおいて、空前の資料といふべきものである。

なお、カードは地点別と項目別とに分けられて利用の便がはかられている。

2 言語地図は、右の調査カードに基づいて、横長の地形の瀬戸内海の地図上にもろの方言事象を、一項目ごとに一図として、所定の項目に対する地点ごとの言語の異なりを、符号化して書き入れたものである。一目して、言語の分布を瞭然たらしめるとともに、言語の地域的な推移、変遷をも解明しうるなど、いわば無尽蔵ともいふべき研究課題を含んでいる。

3 本学の学生の言語研究の教育上、講義・演習の教具として、遠い

将来にわたって利用しうる教材ともなりうる。

4 瀬戸内海の地勢、文化は、欧州の地中海のそれに比せられるが、地中海の島嶼・沿岸の諸言語・方言は、瀬戸内海の方言と比較し考察される共通点があり、外国の方言学者からも注目されていた。本資料は、その比較研究に資する所が少なくないであろう。

5 今後、瀬戸内海域の方言は、時代の推移とともに大きく変遷して行くことが予想される。将来における瀬戸内海域の方言と、本資料とを比較研究することによって、この地域の言語の歴史的研究が、将来の時点において可能となると思われる。

6 本資料のうち、言語地図の一部（第二次製作地図）は、昭和四十九年に東京大学出版会から『瀬戸内海言語図巻』上巻・下巻として公刊されたが、それは大冊ではあるものの、諸制約から縮写であり、複製としての限界がある。本資料は、その原図として尊ばれるべきものである。

要するに、本資料は、日本語研究の歴史の所産ともなる価値を有し、「昭和の日本語」の、瀬戸内海域における貴重な資料であるといふべきである。

四、所在と設備

瀬戸内海言語資料室の設置場所は、中央図書館の屋上、政経学部と接しその所管内にある。室内には、言語地図を分類して入れる地図庫四十五段と、調査カードを分類して収める七百段のカードボックスを中心とした収納器具、及び講義演習、実習、閲覧に供する机・椅子と製図台・透写台などを納めている。

独立した方言研究所、資料室としては、ドイツのマールブルク大学「ドイツ言語地図研究所」、ベルギーのルーヴェン大学「方言学

研究所」が知られるが、わが国においては國公私立大学の中、最初のものといわれている。

五、本資料の公開

本資料は、「國內外の研究者にも公開し、その研究に資して斯学の發展に期する」との寄贈者の意向にも基づき、広く眞摯な研究者の利用の便をはかりたいと考えている。目下その利用の要領などを検討している。

六、経過と将来の課題

本資料は、瀬戸内海域方言という、一つのまとまりを持った資料であり、内海文化の研究のうえでも貴重な資料である。

したがって、既に本学文学部に設けられている内海文化研究室の基礎資料としての関連も考えなければならないが、言語研究に最も親密な国語学国文学専攻の学生・教官の方言研究の講義・演習のために、常時の効率的な利用と管理とを考慮して、当初その場所を文学部内に考えたのである。諸種の事情から、右に述べた場所に設けられることになった。これには中央図書館と政経学部との格別の御配慮を頂いた。広く学会員の利用をもお願いしたい。

資料は、『瀬戸内海言語函巻』資料を核として、文学部国語学国文学研究室においても方言資料を追加収納する計画であり、将来その他の諸資料をも加えて充実、發展することを庶幾するものである。

思えば、一昨秋以来、一年半の間、飯島宗一学長をはじめ、多くの方々の御尽力を得て漸く、ここに開設の運びとなった。ここに厚く御礼を申し上げますと共に、今後この資料室を温かくお育て下さることを併せてお願いするものである。

(小林芳規)